

あぶらか  
油掛け地蔵



大和盆地のほぼ中央、川西町。広々とした田んぼが続く中、十宇路の脇にぼつりと「油掛け地蔵」が西向きに祀られている。二百年ほど前、泥田の中から引き上げられたものという。ある村人が、お地蔵さんの泥を落とそうと、水をかけ、夕ワシで洗った。「ああ、きれいに なった。さぞお喜びだろう」ところが、その夜、村人は腹痛で苦しみました。家の者が心配したが、思い当たるのはお地蔵さんを洗ったことだけ。お地蔵さんは怒っておられるのか。村人はさっそくお地蔵さんを

もとに戻そうと、泥を塗り、油をかけた。すると、腹痛はうそのように治った。その後、子どものクサ(できもの)で困っていた母親が、このお地蔵さんの油を子どものクサにつけて祈ると治った。それから、クサを治す地蔵として信仰されている。今も、花や水が供えられ、黒光りするお顔に掛けられた油もまだ新しいようだ。造立は室町時代の大永三年(一五二三)という。

この地蔵の横、南北一直線に走る道は、「太子道(筋違い道)」とよばれる。かつて、都が飛鳥にあった時代、斑鳩宮に住んでいた聖徳太子が、公務のため愛馬に乗って往復した道といわれる。二月四日は立春。暦の上では春となり、野や山で新しい命が芽生える。二月十一日の夜、六県神社で行われる「子出来おんだ」の祭。五穀豊穡を祈るお田植祭だが、ユニークなのは、安産祈願も加わること。昔はお産で命を失う母子も多かった。

神事や所作のあと、農家の妊婦が、夫の働く田へ行った時、急に陣痛が始まるという場面。着物の腹に小太鼓を入れて妊婦に扮した厄年の男性が、小太鼓を放り出して安産だったことを表す。夫はそれを拾ってぼんと打ちながら「ぼん(男児)ができた、できた」と喜ぶ。見物人はどっと笑う…というものだ。笑いの向こうから、春がやって来る。油掛け地蔵に射す淡い光も、どこか春めいて優しい。



舟型光背を背に立つ「油掛け地蔵」。高さ約60センチ。子どものクサを治す地蔵として信仰されてきた。地蔵の前には南北に通る太子道。



2月11日夜に行われる「子出来おんだ」の祭。五穀豊穡を祈るとともに、赤ん坊の誕生を喜ぶユニークな祭り。

川西町の散策には、近鉄橿原線結崎駅で下車。「観世能発祥の地」面塚や島の山古墳、数多くの文化財など、見どころがいっぱいです。

